

# 2022年度 機関誌優秀論文賞

## 選考結果と受賞の言葉

### 第6回機関誌優秀論文賞授賞理由

学会奨励賞選考委員長 阿部 昌樹

2020年から2022年までの3年間に機関誌『法社会学』に査読を経て掲載された単著論文で、その論文が掲載された号が刊行された年末において著者が40歳未満であったものを選考対象とした第6回機関誌優秀論文賞は、2022年3月に刊行された機関誌『法社会学』第88号に掲載された郭薇会員の論文「法理論の伝播と『社会』——2000年-2018年中国の学術文献を対象とする川島武宜著作の引用分析」に授与されました。

郭会員の論文は、川島武宜の数本の論文を中国語に抄訳し、中国で刊行された論文集が、中国の法学者にどの程度の頻度で、どのように引用されているのかを、中国の学術データベースに依拠し、計量的な手法を駆使して明らかにしたものです。ある社会において、ある時代に、固有の社会的・時代的なコンテキストのもとで形成された法理論が、異なる社会的・時代的なコンテキストのもとで研究に取り組む研究者に、なぜ、どのように受容されるのかという「法理論の伝播」に関わる問いは、それ自体としては、明治期の日本における法継受を彷彿させるような古典的とも言える問いですが、この問いに、洗練された社会科学的研究手法を用いて挑み、外国産の法理論の受容を促す要因の一端を、説得的に示したことが高く評価されました。

十分な日本語読解能力はなく、それゆえ、日本語で書かれた川島武宜の著作をそのまま読むことができない一般の中国の法学者が、中国語に抄訳された川島武宜の著作を、どのような著作のなかで、どのような意図で引用しているのかを明らかにするために郭会員が本論文で用いた研究手法は、たとえば、日本の法解釈学者や法社会学者による欧米の研究者の著作の利用実態の分析にも応用できるはずで、法学説、法理論、法社会学的研究等の国境や法域を越えた伝播の定量的研究という、新たな研究領域の発展につながっていく可能性があります。そうした今後の発展可能性も、高く評価されました。

### 受賞の言葉

受賞の言葉——第6回 機関誌優秀論文賞

郭薇（北海道大学）

このたびは、拙稿「法理論の伝播と『社会』：2000年—2018年中国の学術文献を対象とする川島武宜著作の引用分析」に機関誌優秀論文を賜り、ありがとうございます。たいへん光栄に存じます。

昨今グローバル化が進む中、学会活動や留学などリアルな学術交流以外にも、情報媒体を介した法理論の越境的な伝播は、ますます活発になっています。拙稿は、そのような法情報の伝播のメカニズムを探るため、2000年代以降に、川島武宜の著作が中国の研究者の間で参照されるようになった現象を事例として検討した

ものです。ここでは、中国の学界における川島理論の流行とその受容の傾向から、日本だけの議論に留まらず、外来的な公式法と既存社会の秩序との調整という問題設定の頑強性を改めて確認することができました。また、周知の通り、戦後の川島武宜の法社会学は日本社会の「近代化」と「民主化」を目指して出発したのですが、現代中国の政治・社会環境に関する問題と「意外」にもマッチしたことから、川島理論が想定した「近代化」や「民主化」の内実については、これから一層明らかにしておく必要があると思った次第です。

本論文において私は思想史でも地域研究でもなく、法意識研究としての発展版を目指しています。つまり、法情報である法理論の読者を通して、法が実際にどのように理解されているのか、それが人々の考え方や間接的には行動に対して、一体どのような影響を与えているのかについて観察するものです。本研究は法学者のコミュニティに特化したものになっていますが、学界以外の読者の反応に関する資料も含めて、研究の対象を拡大していく予定です。

むしろ、本研究に残された課題は少なくありません。最も重要なのは、計量的なテキスト分析によって得られる知見と内的論理の展開を重視する従来の思想史的研究をいかに架橋するかという点にあります。本稿の研究対象となる中国側の読者のほとんどは、川島武宜の専門家でも日本法に高い関心を持っている人でもありません。そのため、ある理論に深くコミットする「コア層」を扱ってきた従来の研究とは異なり、本論文では内容分析として取り上げられにくい「ライト層」の存在を浮き彫りにしました。そして、その「ライト層」において見られる理解というものが、参照されたテキストの概念構成や分析枠組みからどのような影響を受けているのかについては、今後の研究で引き続き探求していくつもりです。

かくいう私自身も中国語の川島武宜著作集を通して、初めて日本の法社会学に触れ、その研究に惹かれた一人です。どのような文献がどのように参照されているかを調べ、研究者自身の問題意識や置かれた環境を点検することになった本論文は、ある意味では「自分のための作品」でもありました。拙稿に注目していただき、励みとなるようなアドバイスやコメントをしてくださった査読担当の先生方、ならびに選考委員会の先生方に対しましては、心から感謝の言葉を申し上げます。

最後に、日頃からお世話になっている学会員の皆様に対しても、改めて御礼を申し上げたいと思います。これまでの学術大会や研究会において、有難いご助言を数多くいただきました。引き続き、みなさまのご指導ご鞭撻をたまわりますれば幸いです。どうもありがとうございました。